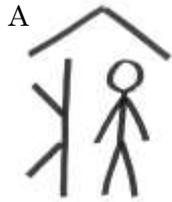




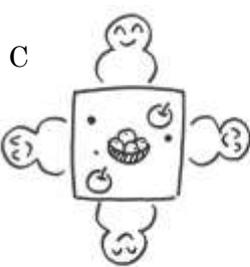
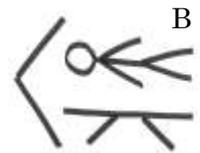
○ KOKUGO II

「寝ていない。」という突っ込みは自然な考え方です。“子どもから成長してきたおとなにとっては”ですね。



上下の感覚や重力などの学習をしてきたおとな（学生たちもこのような意味ではもうおとなです）はホワイトボード（または壁）に描かれたAの図の人間が“立っている”と直感的に判断します。それまでの学習経験から上下（重力の感覚も含めて）を瞬時に識別するんですね。そのため、AでなくBの図でなくては寝ているように思えないわけです。

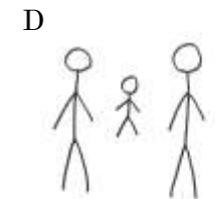
しかし、Aの図は画用紙に描かれていて床に置いてあり、上から見おろしているものと想定してみてください。重力の関係も、どっちが上か下かも説明できなくなります。



Cの図は小さな子どもがよく描きそうな絵の例です。これが壁に貼っていると、おとなは下の人物は“さかさまになっている。”と感じます。このとき「これでは変だから描きなおしなさい。」と指導したらどうでしょう？その子はきっとがっかりし、描画への意欲をなくしてしまいそうですね。

「川の字になって寝る。」という表現があります。Dのような状況ですね。小さな子どもが描いた絵のようにも見えてきませんか？

おとなは上下関係などを学んできた知識で理解しますが、「落とし穴」になる危険も含まれています。ある学生の「突っ込み」をきっかけにして、私は非常に大切なことを再認識させてもらいました。また、保育士となる学生にとっては特に大切なことがらだと思いました。授業中にはしゃべることができなかったのでこのたよりで紹介してみました。



さて、人はいろいろなことを学んでいき“おとな”になるわけですが、どの時点が修了でしょうか？二十歳の成人が修了であるわけはありません。三十代四十代もまだまだでしょう。還暦を迎えた六十歳は？…まだですね。身体の成長はあるとき止まりますが、脳への蓄積はずっと続きます。画家のピカソなどは九十歳超になっても創作意欲が旺盛であったということです。

と、このようなことを私は今つくづく思っています。公立の学校を退職して幸運にも新しい環境で勤めさせていただいていますが、発見すること・おもしろいことがいっぱいです。

自校自賛

本校玄関前の美しい樹木
生き生きと、学生たちを迎えています。

